“ジュムルーキーヤ”への道（1）

――バッシャール・アル＝アサド政権の成立――

青　山　弘　之

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　権力の二層構造
Ⅲ　バッシャール・アル＝アサドの台頭
　1．“古参”と“新たな血”の融合
　2．腐敗との闘い
Ⅳ　ハーフィズ・アル＝アサド前大統領の“最後の遺言”
　1．“古参”による迅速な対応
　2．バアス党第9回シリア地域大会
　3．バッシャール・アル＝アサドの大統領への就任

Ⅰ　はじめに

「世代交代」は，今日のアラブ諸国の政治を理解するうえでもっとも重要な論点の一つである。君主制を敷く国々，例えばモロッコやヨルダンでは，新国王の政治的才覚の有無が語られ，サウジアラビアでは，王位継承者たちの高齢化に伴う後継者危機が問題となっている。だが，「世代交代」がより深刻な問題として提起されているのは，むしろ共和制を敷く国々においてである。権威主義や独裁のもとで長期安定政権を実現してきたこれらの国々において，大統領を頂点とする政権中枢の“代替わり”は，既存の支配構造をいかに維持し続けるのか，あるいは，いかなる政治的変化を経験しなければならないか，といった問題と直結している。

近年，共和制を敷くアラブ諸国は，この問題の解消をめざすべく，共通の解決策を用意しつつある。“ジュムルーキーヤ”（jumlūkīyah）の確立がそれである。“ジュムルーキーヤ”とは，アラビア語の“ジュムフーリーヤ”（jumhūrīyah：共和制）と“マラキーヤ”（malakīyah：王制）から作られた複合語で，「大統領職の世襲」，ないしは「大統領制の世襲化」を意味する。この言葉は，息子への権力移譲を画策するエジプト，イラク，イエメンといった国々の大統領を批判・揶揄する用語として定着しつつある。

本稿で取り上げるシリア・アラブ共和国は，“ジュムルーキーヤ”の確立をめざすこれらアラブ諸国のなかで最先端を行く国である。2000年6月10日，30年近くにわたってシリアの絶対的指導者として君臨してきたハーフィズ・アル＝アサド（Ḥāfiẓ al-Asad：大統領在位1971年3月～2000年6月）が死去したのに伴い，二男バッシャール・アル＝アサド（Bashshār al-Asad：1965年9月11日生まれ）がその地位を継承し，7月17日に後継大統領に就任したこと

で，アラブ諸国初の“ジュムルーキーヤ”の確立に成功したからである。このプロセスの成否は，B・アサドの政治手腕が未知数で，しかもḤ・アサド前大統領の指導性がシリアの支配構造を維持・強化するうえで不可欠だと考えられてきたため，以前から懸念されてきた。しかし，おおかたの予想に反し，彼は父に勝るとも劣らぬ指導力を発揮し，安定した政権運営を行っている。

本稿――「バッシャール・アル＝アサド政権の成立」――では，B・アサドへの権力移譲がいかに行われたのか，言い換えると，アラブ世界初の“ジュムルーキーヤ”がいかに確立したのかを取り上げる。具体的には，まずⅡ節で，Ḥ・アサド前大統領が構築したシリアの支配構造の本質と特徴を概観し，そのなかで権力移譲がいかなる手順で行われねばならなかったかを指摘する。続くⅢ節では，次期後継者に抜擢されたB・アサドが権力を強化していく過程と，大統領就任以前の権力誇示の手法を明らかにする。そしてⅣ節では，Ḥ・アサド前大統領を失った体制が，いかにしてB・アサドを新指導者に就任させていったかを見る。以上を通じて，シリアの現政権が依然として権威主義と独裁に彩られている事実を再確認する。また，共和制下のアラブ各国における「世代交代」の成否を見極めるためのメルクマールを提示すべく，シリアにおいて権力移譲と政権維持を可能たらしめた諸要因を考察する。

なお，本誌次号に掲載予定の「バッシャール・アル＝アサドによる絶対的指導性の顕現」では，B・アサドによる支配のありように焦点をあて，彼がいかにして絶対的指導性を誇示しようとしているかを論じる。

Ⅱ　権力の二層構造

B・アサドへの権力移譲を的確に把握するには，その権力の性格を規定する支配構造の本質と特徴を明らかにする必要がある。そこでまず本節では，Ḥ・アサド前大統領が作り上げたシリアの支配構造と，そこから生じる権力のありようを概観する。

「矯正運動」(al-ḥarakah al-taṣḥīḥīyah)[注1]の名で知られるḤ・アサド前大統領の支配は，政治における「多元主義」(ta‘addudīyah）と「民主主義」，経済における「インフィターフ」(infitāḥ：門戸開放）をめざし，表向きは三権分立の法治国家としての体裁をとっていた。しかし，著者が既発表論文「政治の多元化か独裁の再生産か：1990年代半ば以降のシリアにおける支配の論理」(『現代の中東』第28号，2000年３月，34～48ページ)で明らかにしたとおり，それは権威主義と独裁を本質としていた[注2]。

Ḥ・アサド前大統領を頂点とするシリアの支配構造に関して，マフムード・サーディク(Maḥmūd Ṣādiq)は，「目に見える権力」(sulṭah ẓāhirīyah)と「隠された権力」(sulṭah khafīyah)という二つの権力の存在を指摘する。彼によると，「目に見える権力」，ないしは「法的権力」(sulṭah shar‘īyah）とは，「内閣，人民議会［国会－引用者。以下［　］内同じ］……，司法機関，政府機関，地方行政組織……によって担われており」[注3]，シリアに“民主的”な様相を付与すべく機能している。これらのいわば“名目的”権力装置において，Ḥ・アサド前大統領は，大将[注4]，軍・武装部隊総司令官（al-qā’id al-‘āmm lil-jaysh wa-al-qūwāt al-musallaḥah)，アラブ社会主義バアス党(Ḥizb al-

Ba‘th al-‘Arabī al-Ishtirākī：以下，バアス党）民族指導部（Al-Qiyādah al-Qawmīyah）書記長，同シリア地域指導部（Al-Qiyādah al-Quṭrīyah）書記長，進歩国民戦線（Al-Jabhah al-Waṭanīyah al-Taqaddumīyah）(注5)中央指導部（Al-Qiyādah al-Markazīyah）書記長を兼務し，権力のピラミッドの頂点を制度的に確保してきた。

しかし，彼の権力は，“名目的”権力装置の長としての地位ではなく，「隠された権力」の行使によって絶対化されていた。サーディクによると，この権力こそがシリアの「唯一にして真の権力」（al-sulṭah al-ḥaqīqīyah wa-al-waḥīdah）であり，「治安装置」（jihāz al-amn），すなわちシリアにおいてムハーバラート（mukhābarāt）と総称されている10余りの組織に担われ，「公的生活や公的活動の背後で社会的・政治的諸状況のすべての枝葉末節に密かに浸透している」(注6)。

Ḥ・アサド政権下の代表的なムハーバラートは，その任務によって二つのカテゴリーに分類できる。第1のカテゴリーは，体制内外の反対分子の監視，尋問，拘束，逮捕，投獄，拷問などを任務とする諜報機関・治安維持警察組織であり，軍事情報局（Shu‘bat al-Mukhābarāt al-‘Askarīyah），総合情報部（Idārat al-Mukhābarāt al-‘Āmmah），空軍情報部（Idārat Mukhābarāt al-Qūwah al-Jawwīyah），政治治安部（Idārat al-Amn al-Siyāsī），民族治安局（Maktab al-Amn al-Qawmī）などからなる。一方，第2のカテゴリーは，反政府勢力の武力弾圧を任務とする武装治安組織であり，そのなかには，共和国護衛隊（Al-Ḥaras al-Jumhūrī），特殊部隊（Al-Waḥdāt al-Khāṣṣah），そして1985年に解体された革命防衛隊（Sarāyā al-Difā‘‘an al-Thawrah）が含まれる(注7)。

これらのいわば“真”の権力装置は，軍，内務省，バアス党のいずれかの管轄下にあり，制度上は大統領と直結していない。だが実際のところ，その長たちは，血縁関係，信頼関係，さらには“恐畏”の念，すなわち“恐れ”と“畏れ”が相半ばした念によってḤ・アサド前大統領と個人的に結びついており，彼の命に従い――ないしは彼の意向に沿うように――，自らが統括するムハーバラートを動員し，体制の維持・強化に努めてきた。

このような二層構造を特徴とする支配体制のもとで権力移譲を成功させるには，まず「隠された権力」を行使し得る基盤を“真”の権力装置のなかで確保し，そのうえで“名目的”権力装置における公職を獲得することで，「隠された権力」に法的根拠と“民主的”な様相を与える必要があった。

Ⅲ　バッシャール・アル＝アサドの台頭

B・アサドの政治的台頭は，シリアにおける“ジュムルーキーヤ”確立の動きのなかで――そして彼自身の人生において――予期せぬものだった。なぜなら，次期後継者としての将来を確約されていた兄バースィル・アル＝アサド（Bāsil al-Asad）が自動車事故で不慮の死を遂げた1994年1月21日まで，彼は眼科医を志し，政治とは無縁の存在だったからである(注8)。本節では，このような“予期せぬ”後継者であったB・アサドが，Ḥ・アサド前大統領が死去する2000年6月10日までに，いかにして「隠された権力」を確保・誇示したかを明らかにする。

兄バースィル・アル＝アサドの葬儀に参列

するために留学先のロンドンから帰国したB・アサドが次期後継者に転身した経緯については，二つの対照的な見解が知られている。第１の見解は，自らの意志で後継者の道を選んだというものである。これに関して，イッザト・アル＝サアダニー（ʻIzzat al-Saʻdanī）は次のような逸話を紹介している。

「バッシャールよ，いつロンドンに戻るのだ？」。［Ḥ・アサド前大統領の問いに，B・アサドは］答えた。「戻って何をするというのですか？……バースィル兄さんが志した道を歩みたい。カルダーハ（Qardāḥah）の我が家を囲み，バースィル兄さんの道を歩むよう私に求める数千のシリア国民の声に答えたい。そう心変わりしました。父さんが許してくれるなら，バースィル兄さんが歩んだ険しい道を進む決意です」(注9)。

これに対し，第２の見解は，Ḥ・アサド前大統領に強いられて，眼科医としての将来を断念したというものである。この見解は，B・アサドが周囲の親しい友人たちに漏らした「別に大統領になりたいわけではない」(注10) という言葉が，人々の間で噂として語られるなかで定着した。

ことの真相がいかなるものであれ，B・アサドは，兄の足跡をほぼ忠実にたどるかたちで，“真”の権力装置における権力基盤を確保した。すなわち，国内最強のムハーバラートである共和国護衛隊の実質的な指揮権を任されることで，「隠された権力」の行使が可能となったのである(注11)。そして政治的な実績を積むべく，対レバノン政策を担当し，エミール・ラッフード（Imīl Laḥḥūd）の大統領就任（1998年11月）やサリーム・アル＝フッス（Salīm al-Ḥuṣṣ）の首相選出（同年12月）を後押しした(注12)。また，外国――とりわけ，アラブ諸国――の首脳との会談を通じて，公式の場にも姿を現すようになった。1999年２月にはヨルダンを訪問し，国王アブド・アッラーフ（ʻAbd Allāh）２世と会談し，同年７月から10月にかけて，サウジアラビア，バハレーン，クウェートを訪問した。さらに同年12月には，フランスを訪問し，ジャック・シラク（Jacques Chirac）大統領と会談した。

しかし，職業軍人であった兄が父譲りの精悍さや力強さを備えていたのとは対照的に，眼科医志望であったB・アサドはどこか頼りなさげで，Ḥ・アサド前大統領が築き上げた体制を牽引しうるだけの“力”を欠いているように思えた。医務局付大尉としての肩書きを持っていた彼は，ロンドンから帰国するとただちにホムス士官学校の機甲師団局に勤務するとともに，ダマスカスの高等軍事アカデミー参謀コースを修め，1994年11月に機甲師団司令官に就任した。そして，1995年１月には少佐に，1997年７月には参謀本部付中佐に，1999年１月には同大佐に昇進していった。だが，このような付け焼き刃的な昇進だけで，B・アサドの“弱さ”が払拭されることはなかった。このような事態に対して，Ḥ・アサド政権は，彼の次期後継者としてのプレゼンスをアピールするために，まず二つの施策を講じた。

第１の施策は，次期後継者としての資質を，“力”でなく，ロンドン留学を通じて得た国際感覚と高学歴，ハイテクへの関心の高さなど，“智”によって特徴づける試みである。B・アサドは，情報科学協会（Al-Jamʻīyah al-ʻIlmīyah

al-Ma‘lūmātīyah)会長に就任し，若いテクノクラートの育成や，インターネット・サーヴィスの導入を主導することで，シリアの近代化，ハイテク化，そしてグローバル化の旗手として位置づけられていったのである。

第２の施策は，体制内におけるB・アサドの権力を相対的に強化する試みである。これは，アリー・ハイダル（‘Alī Ḥaydar）前特殊部隊司令官（1994年７月に逮捕），ヒクマト・アル＝シハービー（Ḥikmat al-Shihābī）参謀総長（1998年６月に退役），ムハンマド・ナースィーフ（Muḥammad Nāṣīf）総合情報部次長兼同内務課（Al-Far‘ al-Dākhilī）長（1999年４月に同内務課次長に降格），ムハンマド・アル＝フーリー（Muḥammad al-Khūlī）空軍司令官（1999年６月に退役），アリー・ドゥーバー（‘Alī Dūbā）軍事情報局長（2000年２月に同局次長へ降格）ら，長年にわたってḤ・アサド前大統領を支えてきたムハーバラートや軍の幹部を“排除”することですすめられた[注13]。

以上二つの施策は，大統領職の世襲化をめざすḤ・アサド前大統領の意志の堅さを知らしめるだけでなく，B・アサドの「隠された権力」を強化するのに効果的であった。そしてこれにより，後継者としての足固めを完了したB・アサドは，2000年に入ると，自ら権力移譲を加速させるかのように二つの運動を主導していった。「“古参”（al-ra‘īl al-qadīm）と“新たな血”（al-dimā’ al-jadīdah）の融合」と「腐敗との闘い」がそれである[注14]。

１．“古参”と“新たな血”の融合

2000年３月７日付の日刊紙『アル＝ハヤート』（*Al-Ḥayāh*）に掲載されたインタビューで，B・アサドは次のように述べ，シリア国内における変化が間近であることを示唆した。

> 我々はかつてなかったほどの変革を必要としている……。経済，情報，教育制度，テクノロジー，都市・農村関係，対外関係，官僚制度，さらには習慣や伝統さえも変革する必要がある……。［新内閣は］行政を近代化し，腐敗を最小限にすること［を第１の目的とし，私の役割は］有能な人物を内閣やバアス党の指導部に推挙することに限られる（傍点筆者。以下同じ）……。［新内閣に求められる資質は］能力，実直さ，行政的手腕であり，以上三つの要素が満たされれば，我々が望む政府を実現できる……。我々は体制に“新たな血”を流し込まねばならない。しかし，このことは経験豊富なメンバーの排除を意味するのではない[注15]。

B・アサドがメディアを通じて自らの政治ヴィジョンを提示したのは，これが初めてではなかった[注16]。だが，この発言は，第１に彼自身が政治の場でのあからさまな影響力の行使を明言した点において，第２にその言葉が体制内でただちに実行へと移された点において従来と異なっていた。

『アル＝ハヤート』にインタビュー記事が掲載された翌日，すなわち「バアス革命」37周年にあたる2000年３月８日，マフムード・アル＝ズウビー（Maḥmūd al-Zu‘bī）内閣が総辞職した。内閣改造は，同年２月後半のバアス党地域指導部会合で討議され，次期首相候補として，ファールーク・アル＝シャルア（Fārūq al-Shar‘）外務大臣，スライマーン・カッダーフ（Sulaymān Qaddāḥ）地域指導部副書記長，ムハ

ンマド・ズハイル・マシャーリカ（Muḥammad Zuhayr Mashāriqah）バアス党・進歩国民戦線担当副大統領の名があげられた[注17]。だが，首相に抜擢されたのは，アレッポ県知事を務めていた無名のムハンマド・ムスタファー・ミールー（Muḥammad Muṣṭafā Mīrū）[注18]であった。彼は，責任感の強さ，実直さ，活発さ，他者への寛容さ，協調性といった点で高い評価を受け，首相に抜擢されたと言われているが，これらの資質は，Ｂ・アサドが掲げた新政府の「三つの要素」に合致するものであった。

ミールーが組閣要請を受けた１週間後の３月14日，36名からなる新内閣が発足した（第１表参照）。その人選は，「“古参”と“新たな血”の融合」という表現をまさに反映していた。ムスタファー・トゥラース（Muṣṭafā Ṭulās）国防大臣（兼副首相），ムハンマド・アル＝アマーディー（Muḥammad al-ʻAmādī）経済大臣，ムハンマド・ハルバ（Muḥammad Ḥarbah）内務大臣，ムハンマド・ハーリド・アル＝マハーイニー（Muḥammad Khālid al-Mahāyinī）財務大臣，ムハンマド・マーヒル・ジャマール（Muḥammad Māhir Jamāl）石油大臣ら，13名の留任は，1999年３月に５期目の大統領任期を迎えたḤ・アサド前大統領が施政方針演説のなかで提示した改革プログラム――「腐敗との闘い」，「経済改革」，「法の効率的適用」，「行政の近代化」を基軸としており，Ｂ・アサドの政治ヴィジョンを容易に想起させた[注19]――の継続を示すものであった。だが同時に，Ｂ・アサドが抜擢したとされる23名の“新たな血”――その多くが50歳以下――が，その実務経験や行政手腕を見込まれて登用されたのは明らかであった。

アドナーン・ウムラーン（ʻAdnān ʻUmrān）情報大臣は，コロンビア大学で政治学と国際法を修めた後，在ニューヨーク・シリア常駐使節，在モスクワ大使，在ベルリン大使，在ロンドン大使，在スウェーデン大使顧問，外務次官を歴任してきた。ナビール・アル＝ハティーブ（Nabīl al-Khaṭīb）法務大臣は経済安全裁判所（Maḥkamat al-Amn al-Iqtiṣādī）長官を，ハッサーン・リーシャ（Ḥassān Rīshah）高等教育大臣は情報科学協会メンバーを，マクラム・ウバイド（Makram ʻUbayd）運輸大臣は有線・無線通信公社（Al-Muʼassasah al-ʻĀmmah lil-Ittiṣālāt al-Silkīyah wa-al-lā-Silkīyah）会長を，マフムード・アル＝サイイド（Maḥmūd al-Sayyid）教育大臣は自由言論協会（Muʼassasat al-Manāṭiq al-Ḥurrah）経済担当副会長を，ハイサム・ドゥワイヒー（Haytham Ḍuwayḥī）大統領担当国家大臣は人民議会議員とシリア学生国民連合総裁をそれぞれ務めてきた。イサーム・アル＝ザイーム（ʻIṣām al-Zaʻīm）計画大臣はモスクワ大学教授を務めていた経済学者で，ハーリド・アル＝ラアド（Khālid al-Raʻd）経済担当副首相は政治学・経済学教授であった[注20]。

サーディクによると，シリアにおける内閣人事は，Ḥ・アサド前大統領が，国防大臣，外務大臣，経済大臣，情報大臣の４名を独断的に選定した後，ムハーバラートが作成した名簿をもとに他の閣僚が任命される[注21]。しかし，ミールー内閣の人選では，Ｂ・アサドが父に代わって閣僚の人選を行うことで，「隠された権力」を政治の場で実際に行使したのである。

２．腐敗との闘い

「腐敗との闘い」は，ミールー内閣のもとで

第1表　ムハンマド・ムスタファー・ミールー内閣閣僚名簿

閣僚ポスト	氏　　名	所属政党
首相	ムハンマド・ムスタファー・ミールー（Muḥammad Muṣṭafā Mīrū）*	バアス党
内閣担当副首相	ムハンマド・ナージー・アル＝アトリー（Muḥammad Nājī al-ʻAṭrī）*	バアス党
経済担当副首相	ハーリド・アル＝ラアド（Khālid al-Raʻd）*	バアス党
国防大臣（兼副首相）	ムスタファー・トゥラース（Muṣṭafā Ṭulās）	バアス党
外務大臣	ファールーク・アル＝シャルア（Fārūq al-Sharʻ）	バアス党
情報大臣	アドナーン・ウムラーン（ʻAdnān ʻUmrān）*	バアス党
経済大臣	ムハンマド・アル＝アマーディー（Muḥammad al-ʻAmādī）	無所属
内務大臣	ムハンマド・ハルバ（Muḥammad Ḥarbah）	バアス党
財務大臣	ムハンマド・ハーリド・アル＝マハーイニー（Muḥammad Khālid al-Mahāyinī）	バアス党
石油大臣	ムハンマド・マーヒル・ジャマール（Muḥammad Māhir Jamāl）	バアス党
農業・農業改革大臣	アスアド・ムスタファー（Asʻad Muṣṭafā）	バアス党
工業大臣	アフマド・アル＝ハムウ（Aḥmad al-Ḥamw）*	バアス党
法務大臣	ナビール・アル＝ハティーブ（Nabīl al-Khaṭīb）*	バアス党
計画大臣	イサーム・アル＝ザイーム（ʻIṣām al-Zaʻīm）*	無所属
電力大臣	ムハンマド・サーイム・アル＝ダフル（Muḥammad Ṣāʼim al-Dahr）	バアス党
高等教育大臣	ハッサーン・リーシャ（Ḥassān Rīshah）*	バアス党
教育大臣	マフムード・アル＝サイイド（Maḥmūd al-Sayyid）*	バアス党
文化大臣	マハー・カンヌート（Mahā Qannūt）*+	バアス党
社会労働大臣	バーリア・アル＝クドスィー（Bāriʻah al-Qudsī）*+	アラブ社会主義連合（Al-Ittiḥād al-ʻArabī al-Ishtirākī）
住宅大臣	フサーム・アル＝サファディー（Ḥusām al-Ṣafadī）	統一主義社会主義者党（Ḥizb al-Waḥdawīyīn al-Ishtirākīyīn）
地方行政大臣	サッラーム・アル＝ヤースィーン（Sallām al-Yāsīn）*	バアス党
投資大臣	ウサーマ・マー・アル＝バーリド（Usāmah Māʼ al-Bārid）*	バアス党
通信大臣	ムハンマド・ラドワーン・マールティーニー（Muḥammad Raḍwān Mārtīnī）	シリア共産党（Al-Ḥizb al-Shuyūʻī）ユースフ・ファイサル（Yūsuf Fayṣal）派
環境大臣	ファールーク・アル＝アーディリー（Fārūq al-ʻĀdilī）*	統一主義社会主義民主主義党（Al-Ḥizb al-Waḥdawī al-Ishtirākī al-Dīmuqrāṭī）
灌漑大臣	ターハー・アル＝アトラシュ（Ṭāhā al-Aṭrash）*	無所属
運輸大臣	マクラム・ウバイド（Makram ʻUbayd）*	バアス党
厚生大臣	ムハンマド・アヤード・アル＝シャッティー（Muḥammad Ayād al-Shaṭṭī）	無所属
宗教関係大臣	ニザーム・ズィヤーダ（Niẓām Ziyādah）	バアス党
観光大臣	カースィム・ミクダード（Qāsim Miqdād）*	無所属
建設大臣	ニハード・ムンシャティト（Nihād Munshaṭiṭ）*	アラブ社会主義者運動（Ḥarakat al-Waḥdawīyīn al-Ishtirākīyīn）
大統領担当国家大臣	ハイサム・ドゥワイヒー（Haytham Ḍuwayḥī）*	バアス党
人民議会担当国家大臣	ムハンマド・ムフディー・サイフー（Muḥammad Mufdī Sayfū）*	バアス党

外務担当国家大臣	ナースィル・カッドゥール（Nāṣir Qaddūr）	バアス党
国家大臣	マフール•アブー•ハーミダ（Makhūl Abū Ḥāmidah）*	シリア共産党ウィサール・ファルハ派（Wiṣal Farḥah）
国家大臣	ハッサーン・アル＝ヌーリー（Ḥassān al-Nūrī）*	無所属
国家大臣	イフサーン・シュライティフ（Iḥsān Shuraytiḥ）*	バアス党

＊：新閣僚。　＋：女性。
（出所）筆者作成。
（資料）青山「ミールー新内閣発足」38-41ページ；*Al-Ba'th,* March 8, 9, 10, 11, 12, 2000; *Al-Ḥayāh,* February 20, 21, 23, 25, March 5, 8, 15, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* March 8, 2000; *Al-Thawrah,* March 8, 2000; *Tishrīn,* March 8, 2000.

最初に実施された本格的な政策であった。B•アサドは，この運動を実際に主導することで自身への“恐畏”の念を体制内外に喚起していった。

最初の標的になったのは，2000年２月後半のバアス党地域指導部会合で「Ḥ• アサド［前］大統領［の］……改革プログラムの実施に行き詰まった」(注22)という批判を浴びていたズウビー前首相であった。５月10日，彼は「首相在任中の……執務，悪行，行動規範が，党の価値観，道徳，原則に反するだけでなく，法を逸脱し，党の名声，国家，祖国の経済に深刻な損害をもたらした」との理由でバアス党を除名されたのである(注23)。この処分を受け，５月13日，財務省当局は，1800万米ドル相当の公金横領の疑いで，ズウビー前首相本人および家族名義の動産・不動産を差し押さえるとともに，彼らに渡航禁止を通達し，経済安全裁判所への起訴を決定した。

ズウビー前首相には，公金横領と職権濫用という体制が科した罪を償う以外に残された道はないかに思えた。だが，事態は予想外の結末をもって幕を閉じた。召喚状を携えた司法当局者が身柄拘束先であるダマスカス郊外の彼の自宅を訪れた５月21日昼，彼は拳銃自殺を遂げたのである。

この結末は，「ズウビーは自殺したのか，抹殺されたのか」(注24)とシリア•ムスリム同胞団（Jamā'at al-Ikhwān al-Muslimīn fī Sūrīyah）が評したとおり，実に謎めいていた。その死を予告するかのように，数日前からズウビー前首相の自殺未遂や健康状態の悪化の噂が広まり，また自殺の際に複数の銃声が聞こえたという証言が報告されたことから，他殺との憶測さえ呼んだ。加えて，公金横領と職権濫用という容疑が“粛清”の名目的な理由に過ぎないと主張する者も現れた。レバノンのジャーナリストによると，ズウビー前首相は，Ḥ• アサド前大統領の妻アニーサ・マフルーフ（Anīsah Makhlūf）の兄弟――アフマド•マフルーフ（Aḥmad Makhlūf），あるいはイブラーヒーム・マフルーフ（Ibrāhīm Makhlūf）――の指示を受け，1998年にシリアが購入した武器の代価として北朝鮮に譲渡されるはずだった天然ガスの密売に失敗し，政治生命を絶たれた，というのである(注25)。

ことの真相がいかなるものであれ，ズウビー前首相を死へと追いやった「腐敗との闘い」は，前閣僚や政府高官を対象としたかたちで大々的に展開し，アブド・アル＝カリーム・ムフィード（'Abd al-Karīm Mufīd）前運輸大臣（５月21日に起訴），サリーム・ヤースィーン（Salīm Yāsīn）前経済担当副首相（同29日に起訴），ウマル・リダー（'Umar Riḍā）シリア航空公社（Mu'assasat al-Ṭayarān al-Sūrīyah）社長（同月末に起訴）らが次々と摘発されていった

(第２表参照)。しかし，この運動によって暴露された“腐敗”が氷山の一角に過ぎなかったことは言うまでもない。なぜなら，Ḥ・アサド政権を支えてきた政府高官や官僚のほとんどが，程度の差こそあれ，職権を濫用し，脱税，密輸，公金横領などに関与してきたことは，周知の事実だからである。にもかかわらず，その一部だけが摘発されたのは,「腐敗との闘い」が体制内の綱紀粛正とは別の目的を持っていたからだと考えられる。すなわち,体制に長らく忠誠を尽くしてきた人物さえもが，これまで黙認されてきた“腐敗”を口実に排除される可能性を示すことで,「腐敗との闘い」を主導するＢ・アサドへの“恐畏”の念を国内で煽るねらいがあったと解釈できるのである。

「“古参”と“新たな血”の融合」と「腐敗との闘い」を通じて「隠された権力」を誇示し，体制内外に“恐畏”の念を喚起したＢ・アサドは，いよいよ“名目的”権力装置のなかで責任あるポストを与えられ，父が兼務する公職を一つずつ引き継いでいくかに思えた。事実，次節で取り上げるとおり，そのための最初のステップは，５月にバアス党第９回シリア地域大会（mu’tamar quṭrī）予備選挙が開始されることで，まさに踏み出されようとしていた。しかし，漸進的な公職移譲というこのシナリオは，Ḥ・アサド前大統領の死によって大幅な修正を加えられ，Ｂ・アサドは一気にシリアの新指導者の地位に登りつめることになった。

Ⅳ　ハーフィズ・アル＝アサド前大統領の“最後の遺言”

2000年６月10日，Ḥ・アサド前大統領が，長年にわたる闘病の末，69歳でこの世を去った[注26]。彼個人の政治手腕にあまりにも多くを依存してきた体制は，その死によって混乱する，そう誰もが予想していた。しかし，残された政権中枢は，あたかも彼の“最後の遺言”に忠実に従うかのように，Ｂ・アサドへの権力移譲という至上命令を迅速に実行していた。本節では，Ḥ・アサド前大統領が死去してから，大統領信任投票が行われる７月10日までの間に，Ｂ・アサドがいかにして“名目的”権力装置における最高職を獲得し，名実ともにシリアの新指導者となったかを詳しく見る。

１．“古参”による迅速な対応

Ḥ・アサド前大統領が兼務してきた公職のＢ・アサドへの移譲は，人民議会，軍，バアス党において行われたが，それを主導したのは，“古参”の幹部たちであった。

６月10日午後６時00分，シリア・アラブ・テレビがḤ・アサド前大統領の死を報じたのと同じ時刻に,アブド・アル＝カーディル・カッドゥーラ（‘Abd al-Qādir Qaddūrah）議長は人民議会を招集し，恒久憲法（Al-Dustūr al-Dā’im）第83条が規定する大統領就任資格年齢を40歳からＢ・アサドの歳である34歳に引き下げる提案をした。この提案は，特別委員会での30分に及ぶ審議を経て満場一致で可決され，憲法第83条は以下のように修正された。

第２表 「腐敗との闘い」で摘発された事件

年　月　日	摘　発　さ　れ　た　事　件
1998年７月	バシール・アル＝ナッジャール（Bashīr al-Najjār）総合情報部長（当時）が，財務省在勤中（1994年以前）の横領と“セックス・スキャンダル”への関与を追及され，罷免・逮捕される。
2000年５月10日	ズウビー前首相が,「首相在任中の……執務，悪行，行動規範が，党の価値観，道徳，原則に反するだけでなく，法を逸脱し，党の名声，国家，祖国の経済に深刻な損害をもたらした」との理由でバアス党を除名される。
2000年５月11日	ダマスカス県とアレッポ県の関税局員と工業施設職員多数が解職処分を受ける。
2000年５月13日	財務省当局は，1800万ドル相当の公金横領の疑いで，ズウビー前首相本人と，妻のナウワール・アル＝ダルービー（Nawwār al-Darūbī），息子のムフリフ（Mufliḥ al-Zu ʻbī），ハマーム（Ḥamām al-Zu ʻbī），娘のイナース（Inās al-Zu ʻbī）名義の動産・不動産を差し押さえるとともに，彼らに渡航禁止を通達し，経済安全裁判所への起訴状の提出を決定する。
2000年５月半ば	ロンドンに滞在中のムハンマド・サルマーン（Muḥammad Salmān）元情報大臣の不正関与が報じられる。この報道は，後に彼がシリアに帰国し，バアス党第９回地域大会に出席したことで誤報と判明した。
2000年５月14日	製薬会社 THAMECO で，24万ドル相当の不良債権の存在が明らかとなり，職員３名――ラドワーン・スィルウ（Raḍwān Silw），ムウタスィム・アスラーン（Mu ʻtaṣim Aṣlān），アーディル・カッサーム（ʻĀdil Qassām）――の財産が差し押さえられる。
2000年５月21日	ズウビー前首相が拳銃自殺を遂げる。
2000年５月21日	滞在先のロンドンより５月10日に送還されたムフィード前運輸大臣が，横領と機密漏洩の疑いで起訴され，本人および家族名義の動産・不動産を差し押さえられる。
2000年５月28日	アメリカに逃亡中のムハンマド・ハイダル（Muḥammad Ḥaydar）元経済担当副首相が起訴され，７月28日の欠席裁判で，「民族感情を損ね，人種主義的・イデオロギー的感情を唱道した」罪で，15年の禁固刑を宣告される。
2000年５月29日	ヤースィーン前経済担当副首相が，横領と腐敗の疑いで起訴され，６月24日に身柄を拘束されるとともに，本人および家族名義の動産・不動産を差し押さえられる。
2000年５月末	民間航空公社（Al-Mu’assasah al-ʻĀmmah lil-Ṭayarān al-Madanī）職員多数が横領と腐敗の疑いで逮捕される。
2000年５月末	シリア航空公社で，ロシア産の燃料価格の変動への対応の遅れが原因で500万ドルの“損失”が生じていた事実が発覚する。
2000年５月末	シリア航空公社所有のジャンボ２機の維持をめぐり10億ドルの“損失”が生じた疑いで，リダー社長の財産が差し押さえられる。
2000年６月初め	観光促進局（Al-Tarwīj al-Siyāḥī）長，遺跡・博物館局長（Al-Mudīr al-ʻĀmmah lil-Āthār wa-al-Matāḥif）など，観光省と文化省の高官数名が免職される。
2000年６月初め	1998年７月に公金横領の罪で12年の禁固刑を宣告されていたナッジャール総合情報部前部長本人と家族名義の財産が競売にかけられ，10億シリア・リラ（約2000万ドル）で売却される。
2000年６月５日	ホムス県，タルトゥース県，ハサケ県，アレッポ県の物品流通局（Makbat Naql al-Baḍā’i ʻ）長４名と，ダマスカス県，ダマスカス郊外県の物品流通整備監督機構（Al-Jihāz al-Ra’īsī li-Tanẓīm Naql al-Baḍā’i ʻ）長２名が不正容疑で解職処分を受け，同局とシリア・ヨルダン陸運社（Al-Sharikah al-Sūrīyah al-Urdunnīyah lil-Naql al-Barrī）の人事が改変される。
2000年６月６日	アラブの主要各紙は，シハービー前参謀総長が在任中の横領と職務怠慢の疑いで近く起訴されると報じる。この報道は，６月７日に彼が前立腺ガン治療のためにアメリカへ発ったことで，信憑性を増したが，同月20日にシリアに帰国し，24日にＢ・アサドと会見するに至り誤報と判明した。
2000年７月３日	ダマスカス国際博覧会（Maʻraḍ Dimashq al-Duwalī）で，1000万リラ（約20万ドル）相当に及ぶ架空名義の小切手が発行されていた事実が発覚し，アブド・アル＝マジード・アル＝ハウウ

	(‘Abd al-Majīd al-Ḥaww)博覧会副会長，ハサン・シャイフ・イーサー（Ḥasan Shaykh ‘Īsā）財務局長，アブド・アル＝ラフマーン・イーサー，(‘Abd al-Raḥmān ‘Īsā)，アドナーン・カースィミー（‘Adnān Qāsimī），ハッサーン・アル＝ザイル（Ḥassān al-Zayr）が逮捕・起訴される。
2000年７月初め	ラッカ県の燃料局（Far‘al-Maḥrūqāt）で，２億1800万リラ（約438万ドル）のガスが“紛失”していた事実が発覚し，同月末までに，ナジュム・ハラール（Najm Halāl）局長を含む高官数名の財産が差し押さえられる。
2000年７月初め	ダマスカス郊外県のガッサーン・カズカズ（Ghassān Kazkaz）燃料局局長を含む同局高官数名が起訴され，財産を差し押さえられる。
2000年７月半ば	シリア航空公社職員63名が，「法と規律の違反，非服従」を理由に解雇される。
2000年７月24日	ズウビー前首相，ムフィード前運輸大臣，ヤースィーン前経済担当副首相が，シリア航空公社所有のジャンボ２機の維持費をめぐる“損失”と，1996年末のフランスからのエアバス６機（２億5000万ドル相当）の購入に関する不正で有罪となる。また後者の事件で，スペイン在住のシリア人，ムニール・アブー・ハドゥール（Munīr Abu Ḥaḍūr）も起訴される。
2000年７月末	ムハンマド・アブー・アル＝ナスル(Muḥammad Abū al-Naṣr)工業銀行(Al-Maṣraf al-Sinā‘ī)総裁を含む同行職員数名が架空証券の取引と贈収賄の容疑で起訴される。
2000年11月初め	農業銀行（Al-Maṣraf al-Zirā‘ī）で不正疑惑が浮上し，ナイーム・ジュムア（Na‘īm Jum‘ah）総裁，ターハー・ナッサール・アル＝サラーフ（Ṭāhā Naṣṣār al-Ṣalāḥ），マフムード・ムハンマド・アル＝ナーシフ(Maḥmūd Muḥammad al-Nāshif)，ムハンマド・サーリフ・アル＝ラーウィー(Muḥammad Ṣāliḥ al-Rāwī)，ムスタファー・イスマーイール・アル＝ダワー(Muṣṭafā Ismā‘īl al-Dawā)，イーサー・サーリー・アル＝ジルド（‘Īsā Sārī al-Jild），シャッラーシュ・アッズー・アル＝ナースィル（Shallāsh ‘Azzū al-Nāṣir）およびその家族名義の動産・不動産1360億リラ(約2億7200万ドル）相当が差し押さえられる。
2001年１月29日	人民議会３名――ムスタファー・アル＝アーイド(Muṣṭafā al-‘Āyid：兼農民総連合総裁)，ラフィーク・ダルウィーシュ（Rafīq Darwīsh），ムハンマド・マイフーブ（Muḥammad Mayhūb：兼農民総同盟執行部メンバー）――の贈収賄と公金横領が発覚したのを受け，カッドゥーラ人民議会議長は３名の捜査を経済安全裁判所に許可する。また，司法当局は，ムアーウィヤ・アブド・アル＝ワーヒド（Mu‘āwiyah ‘Abd al-Wāḥid）を贈収賄と公金横領の容疑で捜査する。

（出所）筆者作成。

（資料）*Al-Ahrām* (Cairo), July 15, 2000; *Al-Ba‘th,* May 22, 2000; *Al-Ḥayāh*, May 12, 13, 14, 15, 23, 29, 30, June 1, 6, 7, 8, 9, 13, 25, July 7, 17, 24, 25, 28, August 3, 2000, January 30, 2001; *Mideast Mirror,* Vol.12, No.127, 6 July 1998, p. 11; *Al-Sharq al-Awsaṭ*, June 25, July 7, 25, 30, 2000, January 31, 2001; *Tishrīn,* November 8, 2000.

共和国大統領候補資格は，市民権および政治的権利を有し，34歳の年齢に達したシリア・アラブ人とする[注27]。

その数時間後，すなわち６月10日深夜から翌11日未明にかけて，今度はバアス党地域指導部が臨時会合を開き，Ｂ・アサドを大統領候補として擁立する決定を下した。Ｂ・アサドの後継者としての将来は，彼を賛美するポスターや横断幕が街頭に貼りめぐらされることで国民に刷り込まれてはいたが，この周知の事実が公式に宣言されることは一度もなかった。Ḥ・アサド前大統領や政権中枢はもちろんのこと，Ｂ・アサド本人さえも，「私の望みは国に奉仕することで，大統領になることではない」[注28]と慎重な発言を行うにとどまっていたのである。しかし，Ḥ・アサド前大統領の死後わずか数時間のうちに，憲法改正という人民議会での“民主的”決定に呼応するかたちで，この慎重な対応は覆され，Ｂ・アサドをシリアの新指導者に就任させる動き

は，バアス党の主導のもとで本格化した。

6月11日，地域指導部は再び臨時会合を開き，軍におけるB・アサドの昇進を討議した。これを受けて，軍は，トゥラース国防大臣を首座とする委員会を設け，B・アサドの大佐から大将への昇進と，軍・武装部隊総司令官への就任に合意し[注29]，Ḥ・アサド前大統領が兼務していた公職のうちの二つをB・アサドに移譲した。軍における昇進は，B・アサドの大統領就任を保証する予防的措置であった。なぜなら，憲法第103条は，「共和国大統領は，軍・武装部隊の最高司令官であり，この権限を行使するために必要な全ての決定と指令を下す」[注30]と規定しているからである。

また，6月11日の臨時会合において，地域指導部は自らが国家の「最高政治機関」として，B・アサドが新大統領に就任するまでの間，国政を担当するという“超法規的”な決定を下し，二つの臨時委員会を設置した。すなわち，第1臨時委員会は，カッダーフ地域指導部副書記長，アブド・アッラーフ・アル＝アフマル（‘Abd Allāh al-Aḥmar）地域指導部副書記長，アブド・アル＝ハリーム・ハッダーム（‘Abd al-Ḥalīm Khaddām）外務担当副大統領，カッドゥーラ人民議会議長，トゥラース国防大臣の5名によって発足し，大統領執務の代行を担当した。また，第2臨時委員会は，カッダーフ地域指導部副書記長，アフマル地域指導部副書記長，ハッダーム副大統領，カッドゥーラ人民議会議長，マシャーリカ副大統領，シャルア外務大臣の6名によって発足し，「共和国大統領候補は，アラブ社会主義バアス党地域指導部の提案に基づき人民議会が選定し，その信任は国民投票を経て行われる」[注31]という憲法第84条第1項の規定に従って，人民議会に提出する大統領候補推薦状の作成にあたった[注32]。

6月10日から11日にかけて行われた一連の対応はまさに常軌を逸していた。憲法第83条の改正と軍における昇進は，通常法に沿って行われはした。だが，当時，参謀本部付大佐という肩書き以外に何らの公職にも就いていなかったB・アサドがそのような恩恵を受ける法的根拠などなかった。一方，地域指導部が設置した二つの臨時委員会は違憲とも解釈できる。バアス党の決定は，「アラブ社会主義バアス党は社会と国家を指導する政党である」[注33]という憲法第8条の規定に沿ったものと解釈できなくもない。しかし，「共和国第一副大統領……は，共和国大統領が執務不能となった場合，その権限を行使する」[注34]という同第88条の規定を遵守するならば，副大統領であるハッダームかマシャーリカが，大統領執務を代行しなければならなかったのである。

2．バアス党第9回シリア地域大会

“古参”による迅速な対応に続いて，2000年6月17日より，バアス党第9回シリア地域大会が開催された。党幹部――地域指導部，中央委員会（Al-Lajnah al-Markazīyah），検閲査察委員会（Lajnat al-Riqābah wa-al-Taftīsh）――の選出と，党の政治，経済，組織方針の審議・決定を目的とする大会の開催は，以下二つの理由で火急の課題であった。

第1に，党大会が15年間にわたり招集されなかったことが，党方針の抜本的見直しの必要性を喚起していた点である。1985年1月に開催された第8回地域大会では，5年に1度，

地域大会を開催し，党の人事と活動方針を見直すという決定がなされたが，1990年と1995年に予定されていた大会は，東西冷戦に伴う国際情勢の変動や中東和平プロセスの進展といったシリア国内外の動きを受けて延期されていたのである[注35]。

第２の理由は，ミールー内閣発足に伴う“新たな血”の台頭と関連していた。トゥラース国防大臣以外の地域指導部メンバーが１人も入閣しないという事態は，党の人事において極めて異例であったため，新閣僚の党内での昇進が不可避となったのである。

しかし実際のところ，第９回地域大会の真の目的が，Ｂ・アサドへの権力移譲の加速にあったことは言うまでもない。なぜなら，権力の二層構造において，バアス党は,「隠された権力」の合法的な行使を可能とする特殊な権力装置として機能しているからである。

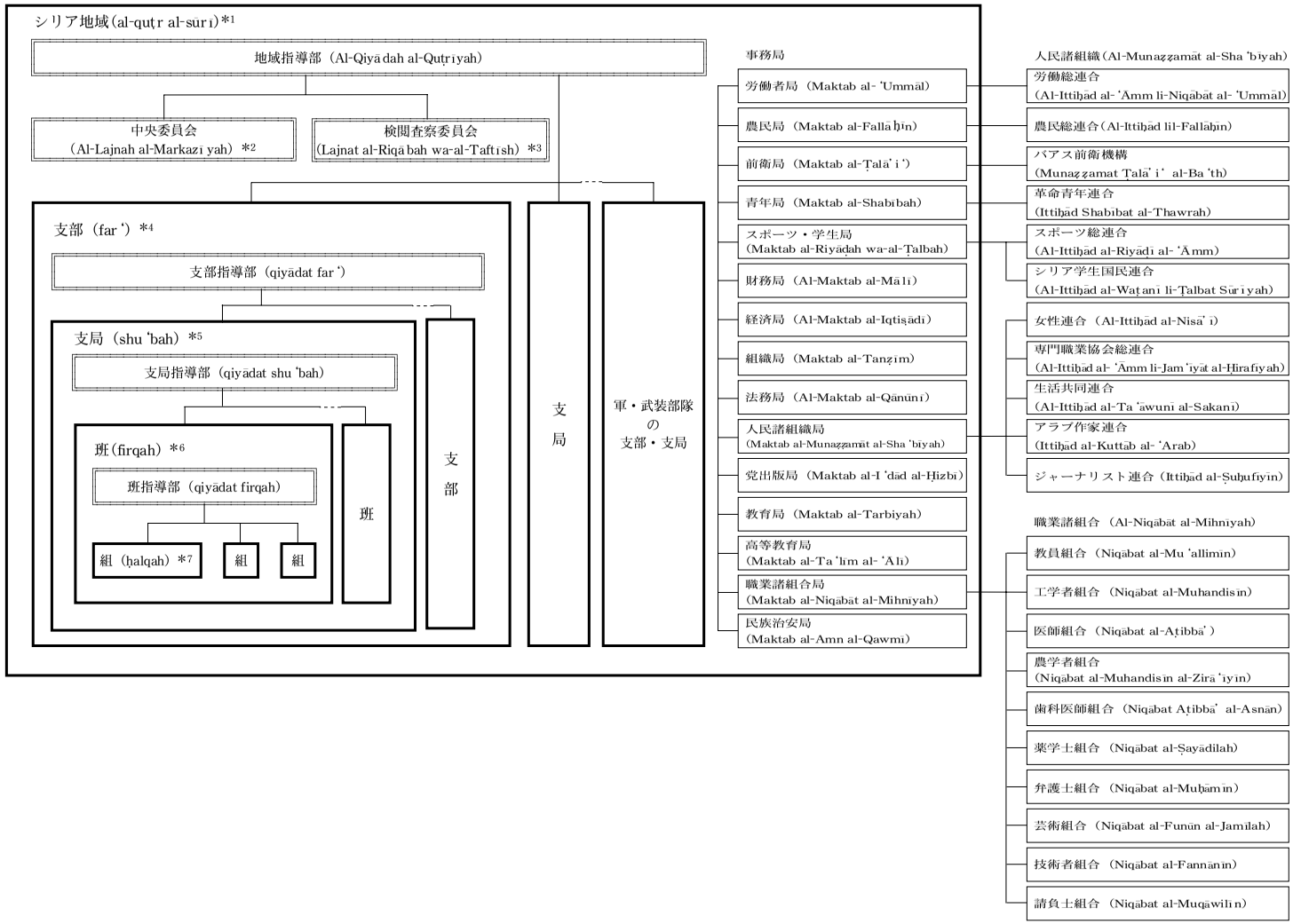
三権分立の法治国家としての体裁をとる今日のシリアにおいて,「隠された権力」の担い手であるムハーバラート――そして軍――の政治介入は，通常法の枠組みのなかでは認められておらず，1963年３月８日の軍事令第２号，すなわち非常事態令によって合法化されているに過ぎない[注36]。これに対し，バアス党は，憲法第８条の規定に基づき，必要とあれば,内閣や人民議会を無視して,“超法規的”な決定を下すことで，自らの政治目的を独断的に達成できる。それゆえ，党内での昇進は,「隠された権力」を確保したＢ•アサドにシリアの新指導者としての公的な地位を付与する最も容易で効果的な方法だったのである。

５月９日，大会に参加する文民党員を選出するための予備選挙が「腐敗との闘い」と並行するかのように開始されると，党内の人事改変の動きは本格化した。大会代表は従来，支局（shu ʻbah）での予備選挙を通じて選出されていたが，第９回地域大会の代表選出は２段階方式をとった。すなわち，５月９日から１週間，3173の班（firqah）において，171万5737名の文民党員が２万4703名の代表候補を選出し，続く５月20日から22日にかけて，145の支局で650名の文民代表が選出された。

予備選挙の結果は，党の人事改変の“公正さと真剣さ”を十分にアピールするものだったと言える。班選挙では，マハー・カンヌート（Mahā Qannūt）文化大臣が落選するとともに，ラアド経済担当副首相とアフマド・ユーニス（Aḥmad Yūnis）検閲査察委員会書記長が出馬を辞退した。また支局選挙では，ドゥワイヒー大統領担当国家大臣，ナースィル・カッドゥール（Nāṣir Qaddūr）外務担当国家大臣，アスアド•ムスタファー（As ʻad Muṣṭafā）農業大臣，ムハンマド•サーイム•アル＝ダフル（Muḥammad Ṣāʾim al-Dahr）電力大臣が落選した。その一方で,“新たな血”を代表するミールー首相，ウムラーン情報大臣，ハティーブ法務大臣，アフマド・アル＝ハムウ（Aḥmad al-Ḥamw）工業大臣，カースィム・ミクダード（Qāsim Miqdād）観光大臣が，順当に選出されることで,「世代交代」の兆しを読みとることもできた[注37]。

一方，軍•武装部隊の党員と党友（anṣār）２万5006名――1656の班，212の支局，27の支部（far ʻ）――もまた独自の代表を選出し，参謀本部付大佐であったＢ・アサドも当然のごとくその１人に含まれた。こうして５月末までに，1150名の大会出席者――正規党員900名，うち民族指導部のシリア人メンバー７名[注38]，地域指導部メンバー21名[注39]，中央委員会メ

図　シリアにおけるバアス党の組織体系



＊1：既存のアラブ諸国に対応する党組織。地域大会は，地域指導部，支部書記長，予備選挙で選ばれた支部の代表，そして独立した支局指導部の参加のもとに開催され，地域指導部の選出，政治，経済，組織方針の決議が行われる。地域指導部は，書記長の選出，地域内の党執務の運営などを行う。
＊2：地域大会休会中に党方針の審議・変更を代行するシリア地域固有の機関。
＊3：党員の道徳，規範を監督するシリア地域固有の機関。
＊4：二つ以上の支局によって構成される党組織。支部大会は，支部指導部，支局書記長，そして支局指導部が選出した代表の参加のもとに開催され，支部指導部の選出を行い，この指導部が，書記長の選出，党の下部組織の指導，新規党員加入の審査，党員教育，宣伝などを行う。
＊5：二つ以上の班によって構成される党組織。支局大会は，支局指導部，班指導部が選出した代表の参加のもとに開催され，支局指導部の選出，上部組織の決定の実行を担当する。支局書記長は支部指導部が任命する。
＊6：3から7の組から構成される最小の組織単位。すべてのメンバーの選挙を通じて発足される班指導部は，党員の日々の活動の監督・指導，組の組織を担当する。班書記長は支局指導部が任命する。
＊7：3から7名の党員から構成される最小の単位で，毎週1度の会合を義務づけられ，党活動の末端を担う。
（出所）筆者作成。
（資料）“Statutes of the Arab Ba ʻth Socialist Party (Official Text — Damascus — October, 1963): As Amended by the Sixth National Congress Held in October, 1963,” in *Arab Political Documents, 1963,* Beirut, American University of Beirut, 1963, pp. 445-462; Kamel S. Abu Jaber, *The Arab Ba ʻth Socialist Party: History, Ideology, and Organization,* New York, Syracuse University Press, 1966, pp. 139-145; John F. Devlin, *The Ba ʻth Party: A History from Its Origin to 1966,* Stanford, Hoover Institution Press, 1976, pp. 15-19; David Roberts, *The Ba ʻth and the Creation of Modern Syria,* London, Croom Helm, 1987, p. 114; Ḥizb al-Ba ʻth, *Taqārīr al-Muʼtamar al-Quṭrī al-Thāmin* ..., pp. 344-353.

ンバー90名，検閲査察委員会メンバー5名，人民諸組織代表11名，文民代表650名，軍人代表116名，そして進歩国民戦線のオブザーバー200名――が決定し，B・アサドの「隠された権力」に法的根拠を与えるための第一歩がまさに踏み出されようとしていた。しかし，Ḥ・アサド前大統領の死によって，大会はB・アサドを一気に党の最高指導者，さらにはシリアの新指導者に担ぎ上げる場となった。

予定より129名少ない1021名の代表が出席するなかで開催された大会では，全体会議においても，政治，経済，組織方針を審議する各委員会(注40)においても，党と国家の新指導者としてのB・アサドの適性が再三にわたって確認された。例えば，カッダーフ地域指導部副書記長は開会の辞で，B・アサドを「旗手として最適の人物」と賞賛し，「[大統領選への出馬は]国民の確固たる望みに対する応えであるとともに，[Ḥ・]アサド[前大統領]の路線の継続（istimrārīyat nahj）を目指すものである」(注41)と述べた。同様の発言は，すべての発言者によって繰り返された。

このような雰囲気のなかで，大会2日目の6月18日，大会出席者は，B・アサドの「指導者としての資質，崇高な道徳，至上の理想」を踏まえ，彼を満場一致で「党と人民の路線の指導者」(qāʼid li-masīrat al-ḥizb wa-al-shaʻb) に任命した。これによって党の“暫定指導者”としての地位を認められたB・アサドは，「6人委員会」（al-lajnah al-sudāsīyah）を発足させ，党を自らの支配下に置いた。トゥラース国防大臣，カッダーフ地域指導部副書記長，アフマル地域指導部副書記長，マシャーリカ副大統領，ハッダーム副大統領からなる同委員会は，B・アサドが正式に党の指導者になるまでの間，地域指導部に代わって党の執務をとりおこなうとともに，大会とは別途に地域指導部，中央委員会，検閲査察委員会の人選を始めた(注42)。

6月20日，予定より1日早く閉会した大会

は[注43]，新幹部を任命し，Ｂ・アサドは，地域指導部メンバーと中央委員会書記長に選ばれた。そして最終的には６月24日，Ｂ・アサドは地域指導部第１回会合で地域指導部書記長に任命され，党の最高指導者に就任したのである[注44]。

Ｂ・アサドの急激な昇進に呼応するかのように，党の人事もまた劇的な変化を遂げた。地域指導部は，９名の“古参”を残して交替し，ミールー首相，ムハンマド・ナージー・アル＝アトリー（Muḥammad Nājī al-ʻAṭrī）内閣担当副首相，シャルア外務大臣など“新たな血”が新メンバーに選出された（第３表参照）。中央委員会では，62名が新任され，ウムラーン情報大臣，ハティーブ法務大臣，リーシャ高等教育大臣，サイイド教育大臣といったミールー内閣の新閣僚だけでなく，Ｂ・アサドの弟マーヒル・アル＝アサド（Māhir al-Asad），トゥラース国防大臣の息子ムナーフ・トゥラース（Munāf Ṭulās）ら，いわゆる“第２世代”が台頭した（第４表参照）。検閲査察委員会では，アブド・アッラーフ・アブー・アル＝リーシュ（ʻAbd Allāh Abū al-Rīsh）を除く４名が新任された（第５表参照。バアス党の組織体系については図を参照）。

バアス党の新指導者としての地位を確保したＢ・アサドは，大会最終日にあたる６月20日，出席者を前に初の公式発言を行い，自らの指導者としての正統性をḤ・アサド前大統領の「路線の継続」に求めるとともに，主に外国のメディアを通じて繰り返してきた自らの政治ヴィジョンの実行を主唱した。

> 偉大な我らの党は……，至上なるバアス党員にして指導者であったハーフィズ・アル＝アサドの価値観に忠実であり続けるだろう……。バアス［党］は，我らのアイデンティティであり，思想であり，教義であり，原則であり続けるだろう……。この喪失［Ḥ・アサド前大統領の死］は，これまで以上に明確に，この［Ḥ・アサド前大統領の］路線が確固たるものだということを再認識させた……。我らの党が時の経過とともに伝統的な政党に成り下がったという考え方がある……。また，今日の世界では，イデオロギーにとって代わって，経済的利害や近代的テクノロジーが政治を決定するようになったために，党のスローガンに未来などない，そう考える党員もいる……。しかし，私がテクノロジーや経済の発展に高い関心を持っていることは周知のことである。それゆえ，そのような考え方には全くもって反対である……。党の教義とスローガンは時代とともに歩む[注45]。

この発言でＢ・アサドが示した論点は，その後，大統領施政方針演説においてさらに詳しく述べられ，彼の行政に反映されていった（Ｂ・アサドの施政方針については，本誌次号に掲載予定の「バッシャール・アル＝アサドによる絶対的指導性の顕現」で詳細に取り上げる）。

３．バッシャール・アル＝アサドの大統領への就任

６月25日から27日にかけて，人民議会が再び招集され，特別委員会と総会で，バアス党地域指導部第２臨時委員会が作成した推薦状をもとにＢ・アサドの大統領信任投票についての討議がなされた。この推薦状は，以下７

第３表　バアス党第９回シリア地域大会で任命されたシリア地域指導部メンバー

バッシャール・アル＝アサド（Bashshār al-Asad）書記長*
アブド・アッラーフ・アル＝アフマル（ʻAbd Allāh al-Aḥmar）副書記長
スライマーン・カッダーフ（Sulaymān Qaddāḥ）副書記長
アブド・アル＝ハリーム・ハッダーム（ʻAbd al-Ḥalīm Khaddām）
ムスタファー・トゥラース（Muṣṭafā Ṭulās）
ムハンマド・ズハイル・マシャーリカ（Muḥammad Zuhayr Mashāriqah）
アブド・アル＝カーディル・カッドゥーラ（ʻAbd al-Qādir Qaddūrah）
ワリード・ハムドゥーン（Walīd Ḥamdūn）労働者局長兼財務局長
ファーイズ・アル＝ナースィル（Fāyiz al-Nāṣir）組織局長
アフマド・ディルガーム（Aḥmad Dirghām）党出版局長兼人民諸組織局長
ムハンマド・ムスタファー・ミールー（Muḥammad Muṣṭafā Mīrū）*
ムハンマド・ナージー・アル＝アトリー（Muḥammad Nājī al-ʻAṭrī）*
ファールーク・アル＝シャルア（Fārūq al-Sharʻ）*
サッラーム・アル＝ヤースィーン（Sallām al-Yāsīn）*
イブラーヒーム・フナイディー（Ibrāhīm Hunaydī）農民局長*
ファールーク・アブー・アル＝シャーマート（Fārūq Abū al-Shāmāt）法務局長兼職業諸組合局長*
ムハンマド・ギヤース・バラカート（Muḥammad Ghiyāth Barakāt）高等教育局長*
ワリード・アル＝ブーズ（Walīd al-Būz）教育局長兼前衛局長*
マジード・シュドゥード（Mājid Shudūd）青年局長兼スポーツ・学生局長*
ムハンマド・サイード・バヒーターン（Muḥammad Saʻīd Bakhītān）民族治安局長*
ムハンマド・アル＝フサイン（Muḥammad al-Ḥusayn）経済局長*

＊：新任。
（出所）筆者作成。
（資料）青山弘之「シリア・バアス党第９回地域大会：独裁体制継承の“牽引力”としての党（現地リポート，シリア③）」（『アジ研ワールド・トレンド』第60号，2000年９月）51～54ページ；*Al-Baʻth,* June 25, 2000; *Al-Ḥayāh,* August 25, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* June 21, August 1, 2000.

点を列挙し，大統領候補としてのＢ・アサドの適性を賛美した。

- アサド家で育ち，Ḥ・アサド前大統領の政治学派のもとで成長した。
- バアス党の原則と民族の利益に献身している。
- Ḥ・アサド前大統領が属する「大いなる変革の世代」と若い世代を結びつける役割を担っている。
- 公共の問題や科学への関心が高い。
- 崇高な道徳，優れた素行の持ち主で，人民と良好な関係を築くとともに，彼らに愛を注いでいる。
- 広範な学術活動を行っている。
- Ḥ・アサド前大統領の監督下で優れた経験を積み，任務実行能力を示してきた[注46]。

そのうえで，推薦状は，Ｂ・アサドが大統領に就任すれば，「Ḥ・アサド前大統領の路線の継続，政治的多元主義，行政の近代化，国民の生活水準の向上，腐敗との闘い，占領地解放への絶え間なき努力」が実現し，「継続のなかの刷新」（al-tajdīd ḍimna al-istimrārīyah）と「安寧のなかの発展」（al-taṭwīr ḍimna al-istiqrār）が保障されると結論した[注47]。

人民議会の議論は，ムンズィル・アル＝ムースリー（Mundhir al-Mūṣlī）人民議会副議長が「[憲法改正は] 法的根拠を欠いているため違憲である」[注48]と発言した６月26日に一時紛糾した。議員がこの発言に猛烈に反発しただけでなく，カッドゥーラ人民議会議長さえ

第４表　バアス党第９回シリア地域大会で任命された中央委員会メンバー

バッシャール・アル＝アサド（Bashshār al-Asad）*
アブド・アッラーフ・アル＝アフマル（ʻAbd Allāh al-Aḥmar）*†
スライマーン・カッダーフ（Sulaymān Qaddāḥ）*†
アブド・アル＝ハリーム・ハッダーム（ʻAbd al-Ḥalīm Khaddām）*†
ムスタファー・トゥラース（Muṣṭafā Ṭulās）*‡
ムハンマド・ズハイル・マシャーリカ（Muḥammad Zuhayr Mashāriqah）*†
アブド・アル＝カーディル・カッドゥーラ（ʻAbd al-Qādir Qaddūrah）*
ワリード・ハムドゥーン（Walīd Ḥamdūn）*
ファーイズ・アル＝ナースィル（Fāyiz al-Nāṣir）*
アフマド・ディルガーム（Aḥmad Dirghām）*
ムハンマド・ムスタファー・ミールー（Muḥammad Muṣṭafā Mīrū）*‡
ムハンマド・ナージー・アル＝アトリー（Muḥammad Nājī al-ʻAṭrī）*‡
ファールーク・アル＝シャルア（Fārūq al-Sharʻ）*‡
サッラーム・アル＝ヤースィーン（Sallām al-Yāsīn）*‡
イブラーヒーム・フナイディー（Ibrāhīm Hunaydī）*
ファールーク・アブー・アル＝シャーマート（Fārūq Abū al-Shāmāt）*
ムハンマド・ギヤース・バラカート（Muḥammad Ghiyāth Barakāt）*
ワリード・アル＝ブーズ（Walīd al-Būz）*
マジード・シュドゥード（Mājid Shudūd）*
ムハンマド・サイード・バヒーターン（Muḥammad Saʻīd Bakhītān）*
ムハンマド・アル＝フサイン（Muḥammad al-Ḥusayn）*
イッズ・アル＝ディーン・アル＝ナースィル（ʻIzz al-Dīn al-Nāṣir）
サイード・ハマーディー（Saʻīd Ḥamādī）
スライマーン・アル＝カーディー（Sulaymān al-Qāḍī）
アリー・アスラーン（ʻAlī Aṣlān）
ハサン・トゥルクマーニー（Ḥasan Turkmānī）
アブド・アル＝ラフマーン・アル＝サイヤード（ʻAbd al-Raḥmān al-Ṣayyād）
ファールーク・イブラーヒーム・イーサー（Fārūq Ibrāhīm ʻĪsā）
イブラーヒーム・アル＝サーフィー（Ibrāhīm al-Ṣāfī）
シャフィーク・ファイヤード（Shafīq Fayyāḍ）
アフマド・アブド・アル＝ナビー（Aḥmad ʻAbd al-Nabī）
タウフィーク・ジャルール（Tawfīq Jalūl）
アリー・ハビーブ（ʻAlī Ḥabīb）
アドナーン・バドル・ハサン（ʻAdnān Badr Ḥasan）
ハサン・ハリール（Ḥasan Khalīl）
マフムード・アンマール（Maḥmūd ʻAmmār）
カマール・マフフーズ（Kamāl Maḥfūẓ）
イブラーヒーム・フワイジャ（Ibrāhīm Ḥuwayjah）
マーヒル・アル＝アサド（Māhir al-Asad）
ムナーフ・トゥラース（Munāf Ṭulās）
アブド・アッラーフ・ガルユーン（ʻAbd Allāh Ghalyūn）
アリー・アル＝フーリー（ʻAlī al-Ḥūrī）
ムハンマド・ハルバ（Muḥammad Ḥarbah）‡
ハッサーン・リーシャ（Ḥassān Rīshah）‡
マフムード・アル＝サイイド（Maḥmūd al-Sayyid）‡
アドナーン・ウムラーン（ʻAdnān ʻUmrān）‡
ナビール・アル＝ハティーブ（Nabīl al-Khaṭīb）‡
アフマド・アル＝ハムウ（Aḥmad al-Ḥamw）‡
ムスタファー・アル＝アーイド（Muṣṭafā al-ʻĀyid）
サアード・バクール（Saʻād Bakūr）
ブサイナ・シャアバーン（Buthaynah Shaʻbān）+
ヒンドゥ・ハティーターニー（Hind Ḥatītānī）+
イルハーム・アル＝アリー（Ilhām al-ʻAlī）+
ユスラー・アル＝タウィール（Yusrā al-Ṭawīl）+
ナジャーフ・ムーサー・アル＝スィット（Najāḥ Mūsā al-Sitt）+
ナビーハ・カッサース（Nahīdah Qaṣṣāṣ）+
ジャミーラ・ジャーッザ（Jamīlah Jāzzah）+
スィナー・イバーラ（Sinā' ʻIbārah）+
ジューリヤー・ミーハーイール（Jūliyā Mīkhā'īl）+
ハイファー・サクル（Hayfā' Ṣaqr）+
カマル・イブラーヒーム・ムハンマド（Qamar Ibrāhīm Muḥammad）+
マハー・シャビールー（Mahā Shabīrū）+
シャフナーズ・ファークーシュ（Shahnāz Fākūsh）+
スィハーム・アル＝サーイグ（Sihām al-Ṣāyigh）+
ハルビーヤ・アル＝バイダ（Ḥarbīyah al-Bayḍah）+
アラー・アル＝ディーン・アービディーン（ʻAlā' al-Dīn ʻĀbidīn）
ファイサル・アル＝カースィム（Fayṣal al-Qāsim）
スブヒー・ハミーダ（Ṣubḥī Ḥamīdah）
ナビール・ウムラーン（Nabīl ʻUmrān）
サイード・アル＝ズハイリー（Saʻīd al-Zuḥaylī）
ユーニス・バルグード（Yūnis Barghūt）
サーフィー・アブーダーン（Ṣāfī Abūdān）
アフマド・ダシュウ（Aḥmad Dashw）
イブラーヒーム・フサイン（Ibrāhīm Ḥusayn）
ラフィーク・ハッダード（Rafīq Ḥaddād）

アスアド・アル＝イーサー（As ʻad al- ʻĪsā）	ムハンマド・アイユーブ（Muḥammad Ayyūb）
サラーフ・カナージュ（Ṣalāḥ Kanāj）	アブド・アル＝カーディル・アル＝フサイン（ʻAbd al-Qādir al-Ḥusayn）
スライマーン・アル＝ナースィル（Sulaymān al-Nāṣir）	ハーリド・アル＝サラーマ（Khālid al-Salāmah）
ムハンマド・ズィアール・アル＝アリー（Muḥammad Zi ʻāl al- ʻAlī）	ムハンマド・イブラーヒーム・アル＝アリー（Muḥammad Ibrāhī m al- ʻAlī）
ジャースィム・アル＝ムーサー（Jāsim al-Mūsā）	アブド・アル＝カリーム・ムスタファー・ハイダル（ʻAbd al-Karī m Muṣṭafā Ḥaydar）
イマード・アル＝アサド（ʻImād al-Asad）	サーミー・アル＝サーリフ（Sāmī al-Ṣāliḥ）
ナジーブ・ガザーウィー（Najī b Ghazāwī）	ガーズィー・ハドラ（Ghāzī Khaḍrah）
ハイル・アル＝ディーン・アル＝サイイド（Khayr al-Dī n al-Sayyid）	

＊：バアス党地域指導部メンバー。　†：バアス党民族指導部メンバー。
‡：ムハンマド・ムスタファー・ミールー内閣閣僚。　＋：女性。
（出所）筆者作成。
（資料）*Al-Ba ʻth,* June 21, 2000.

第５表　バアス党第９回シリア地域大会で任命された検閲審査委員会メンバー

アブド・アッラーフ・アブー・アル＝リーシュ（ʻAbd Allāh Abū al-Rī sh）
ジャミール・ウワイド（Jamī l ʻUwayd）
サラーファ・ディーブ（Salāfah Dī b）＋
ファウズィー・アル＝ジャウダ（Fawzī al-Jawdah）
ザイド・ハッスーン（Zayd Ḥassūn）

＋：女性。
（出所）筆者作成。
（資料）*Al-Ba ʻth,* June 21, 2000.

もが，発言を続けるならば公的措置に訴えると警告を発したのである。しかし当然のことながら，この混乱が大勢に影響を与えることはなかった。審議をテレビで観ていたＢ・アサドが，「議員は彼［ムースリー人民議会副議長］が自らの観点を述べ終えるまで，彼に話しを続けさせねばならなかった」(注49)と述べ，他の議員を批判したことが後に報じられた点を踏まえると，人民議会の紛糾は，あくまでもその“民主的”雰囲気，さらにはＢ・アサドの“寛大さ”を強調するための演出だったとさえ解釈できる。結局のところ，人民議会は満場一致でバアス党の推薦状を可決し，信任投票の日程をḤ・アサド前大統領の死のちょうど１カ月後にあたる７月10日と定めた。

「路線の継続」というスローガンのもと，２週間にわたって展開したヒステリックな選挙キャンペーンの後，7月10日に大統領信任投票が行われ，その結果は翌11日に発表された。有権者総数944万2054，投票者数893万1623，賛成票868万9871（97.293%），反対票２万2439（0.251%），無効票21万9313（2.456%）。支持率はḤ・アサド前大統領と比べると若干低かったものの(注50)，Ｂ・アサドは難なく大統領に選ばれ，７月17日，人民議会で就任宣誓を行うことで，名実ともにシリアの新指導者となったのである(注51)。

その後，７月31日，Ｂ・アサドは，進歩国民戦線中央指導部書記長に就任することで（第６表参照），バアス党民族指導部書記長職を除く父の公職，すなわち，共和国大統領，大将，国軍・武装部隊総司令官，バアス党地域指導部

書記長，そして進歩国民戦線中央指導部書記長を継承した。

＊　＊　＊

シリアにおける“ジュムルーキーヤ”確立の試みは，2000年６月10日以降，Ｂ・アサドが故Ḥ・アサド前大統領の公職を次々と継承していくなかで脚光を浴び，メディアでも大々的に取り上げられた。この間，憲法第83条改正や軍における特進などといった一連の決定が，人民議会，バアス党，軍によって下されたことで，共和制を建て前とする今日のシリアの支配体制が権威主義と独裁を本質としているという事実が改めて暴露されていった。しかし，権力移譲プロセス自体は1990年代後半を通じてＢ・アサドの「隠された権力」が強化されることでほぼ完了していたのであり，この水面下の試みが成功していなければ，Ḥ・アサド前大統領死後１カ月という短期間で，Ｂ・アサドがシリアの新大統領に就任することもなかっただろう。

大統領職をはじめとする公職は，二層構造を特徴とする今日のシリアの支配体制において「目に見える権力」を保障するものに過ぎず，その移譲は，Ｂ・アサドの「隠された権力」に法的根拠と“民主的”様相を付与してこそ，本来の効力を発揮すると考えられてきた。しかしこのような当初の見方に反して，６月10日以降の「目に見える権力」の移譲は，政権の“力”を誇示するかたちで行われた。すなわち，それはＢ・アサドの「隠された権力」が後任大統領の地位にふさわしいだけの絶大さを備えていたことを知らしめるとともに，権威主義と独裁を本質とする体制が独断的な方法で自らの再生に成功したことを示すかたちで展開したのである。

Ｂ・アサドへのこのような権力移譲が彼の政治的素質とは無縁だったことは言うまでもなく，Ḥ・アサド前大統領死後にそれを成就させた最大の要因は，政権中枢の無力さと危機意識であった。今日のシリアの支配構造がḤ・アサド前大統領なくしては機能しえない，ないしは彼以外のいかなる人物によっても維持・強化できないという危機的状況は，1980年代半ばに実弟リファアト・アル＝アサド（Rifa ʻat al-Asad）が権力掌握を企てて以降[注52]，政権が克服すべき最大の内政問題として提起されてきた。この危機を回避すべくḤ・アサド前大統領が案出した解決策が，息子への権力移譲であり，それは「毒をもって毒を制する」試みでもあった。すなわち，彼は，体制の維持・強化に不可欠な自らの絶対的指導性の喪失がもたらすであろう混乱を回避すべく，その絶対的指導性をもって将来の独裁者を自ら育成したのである。

Ｂ・アサドは，これまで体制の維持・強化に何ら貢献していなかったがゆえに“予期せぬ”後継者であり，その将来も当然のことながら懸念された。しかし体制にとって，この“予期せぬ”後継者は同時に“待望されし”指導者でもあった。なぜなら，Ḥ・アサド前大統領の指導なくして何らの最終決断をもなしえない体制にとって，彼の独断的な決定に従い，自らが拠って立つべき未来の絶対的指導者を作り上げることこそ，もっとも安易な延命策だったからである。

しかしながら，シリアにおける“ジュムルーキーヤ”確立の試みを成功へと導いた要因を把握するには，体制の危機感や無力さだけ

第６表　2000年７月31日に任命された進歩国民戦線中央指導部メンバー

氏　　名	所属政党
バシャール・アル＝アサド（Bashshār al-Asad）書記長*	バアス党
ムハンマド・ズハイル・マシャーリカ（Muḥammad Zuhayr Mashāriqah）副書記長	バアス党
アブド・アッラーフ・アル＝アフマル（‘Abd Allāh al-Aḥmar）副書記長	バアス党
アブド・アル＝ハリーム・ハッダーム（‘Abd al-Ḥalīm Khaddām）	バアス党
アブド・アル＝カーディル・カッドゥーラ（‘Abd al-Qādir Qaddūrah）	バアス党
ムハンマド・ムスタファー・ミールー（Muḥammad Muṣṭafā Mīrū）*	バアス党
スライマーン・カッダーフ（Sulaymān Qaddāḥ）	バアス党
ファールーク・アル＝シャルア（Fārūq al-Shar‘）*	バアス党
サッラーム・アル＝ヤースィーン（Sallām al-Yāsīn）*	バアス党
ムハンマド・アル＝フサイン（Muḥammad al-Ḥusayn）*	バアス党
イッズ・アル＝ディーン・アル＝ナースィル（‘Izz al-Dīn al-Nāṣir）	バアス党
ムスタファー・アル＝アーイド（Muṣṭafā al-‘Āyid）	バアス党
ウィサール・ファルハ（Wiṣāl Farḥah）+	シリア共産党ファルハ派
ダーニヤール・ニウマ（Dāniyāl Ni‘mah）	シリア共産党ファイサル派
サフワーン・クドスィー（Ṣafwān Qudsī）	アラブ社会主義連合
ファーイズ・イスマーイール（Fāyiz Ismā‘īl）	社会主義統一主義者党
マクラム・タイヤーラ（Makram Ṭayyārah）	社会主義統一主義者党
アフマド・アル＝アスアド（Aḥmad al-As‘ad）	統一主義社会主義民主主義党
アブド・アル＝ガニー・カンヌート（‘Abd al-Ghanī Qannūt）	アラブ社会主義者運動カンヌート派
ガッサーン・ウスマーン（Ghassān ‘Uthmān）	アラブ社会主義者運動アブド・アル＝アズィーズ・ウスマーン派（‘Abd al-‘Azīz ‘Uthmān）

＊：新任。　　＋：女性。
（出所）筆者作成。
（資料）*Al-Ḥayāh,* August 6, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ*, August 1, 2000; *Tishrīn*, August 6, 2000.

でなく，Ḥ・アサド前大統領の権力者・政治家としての心理を考慮する必要もある。この点に関して，砂山その子は「シリア，ハーフィズ・アル＝アサド政権における“ソフト”な独裁体制維持のメカニズム」（『アジア経済』第42巻第８号，2001年８月掲載予定）のなかで次のような仮説を立てている。

［Ḥ・アサド］前大統領はシリア国家の存続基盤を定義する存在として国家そのものと一体化し，自らを――アタテュルクのように――不朽の存在に仕立てようとした……。独裁者の究極の望みとは何であろうか。生きている限り政権を維持することで権力欲を満たす，あるいは死後親族を後継者の座に据えることで満足する者もいるかもしれない。だが，それを保証できると確信した時には，さらに死後もなお，自らが

支配した国にとって不可欠な存在として“生き続ける”存在になることを望むのは不自然ではあるまい[注53]。

すなわち,「毒をもって毒を制する」試みは,死後も国政を支配し続けたいというḤ・アサド前大統領の権力欲に根ざしていたというのである。この仮説は，シリアの政策決定プロセスにおいてもっとも重要な“ブラック・ボックス”である絶対的指導者Ḥ・アサド前大統領個人の政治的ダイナミクスの解明に挑んでいるという点において高く評価しうる。

しかし，Ḥ・アサド前大統領のこのような権力欲を考慮してもなお，答ええない本質的疑問が残される。自らの存在をシリアという国家において永遠のものとするために，なぜ実子を後継者としたか，という疑問である。なぜなら，後継者が息子である必要は必ずしもなく，息子以外の人物に国の将来を託すという決断を下す方が，家族による権力独占といった批判をかわし，わずかながらではあっても“民主的”様相をアピールできたはずだからである。この疑問に明確な答えを与えるには，シリアの支配構造に求心力を与える政権中枢の人間関係や心性にまで踏み込んだ分析，さらには政治という枠を越えたより包括的なアプローチを必要とする。

シリアにおける“ジュムルーキーヤ”確立の本質を明らかにする足がかりとなるこの疑問は，今後研究を継続するうえでの課題として踏まえることとして，少なくとも現時点で言いうることは，B・アサドが，Ḥ・アサド前大統領の独断的な“遺言”と絶対的指導性を必要とし続ける今日のシリアの支配構造ゆえに新指導者の地位に登りつめたという点である。たとえB・アサドが自らの施政を成功させ，シリアに未曾有の繁栄を実現したとしても，彼は権威主義と独裁の維持・強化をめざす“再生産された独裁者”であり続けるだろう（次号に続く）。

（注１）「矯正運動」とは,1970年11月13日のḤ・アサド前大統領によるクーデタの公式名称である。その基本方針は,クーデタの３日後に彼自身が発表したコミュニケを通じて公表された。Ḥizb al-Ba ʻth al-ʻArabī al-Ishtirākī, al-Qiyādah al-Qawmīyah, *Niḍal Ḥizb al-Ba ʻth al- ʻArabī al-Ishtirākī 1943-1975*［アラブ社会主義バアス党の党争, 1943～1975年］, Damascus, Maṭba ʻat al-Qiyādah al-Qawmīyah, 1978, pp. 116-121を参照。

（注２）青山弘之「政治の多元化か独裁の再生産か：1990年代半ば以降のシリアにおける支配の論理」（『現代の中東』第28号 , 2000年３月）39～43ページ。

（注３）Maḥmūd Ṣādiq, *Ḥiwār ḥawla Sūrīyah*［シリアをめぐる対話］, Beirut, Dār ʻAkkāẓ, 1993, pp. 71-72.

（注４）本稿では，シリアの軍・武装部隊における士官の階級を以下のように訳出する。farīq（大将），ʻimād awwal（第一中将），ʻimād（中将），liwāʼ（少将），ʻamīd（准将），ʻaqīd（大佐），muqaddam（中佐），rāʼid（少佐），naqīb（大尉），mulāzim awwal（中尉），mulāzim（少尉）。

（注５）進歩国民戦線は，バアス党，統一主義社会主義者党，統一主義社会主義民主主義党，アラブ社会主義者運動カンヌート派，同ウスマーン派，アラブ社会主義連合，アラブ民主主義連合党（Ḥizb al-Ittiḥād al- ʻArabī al-Dīmuqrāṭī），シリア共産党ファルハ派, 同ファイサル派からなる大政翼賛的な政治同盟である。

（注６）Ṣādiq, *Ḥiwār ḥawla Sūrīyah,* p. 72.

（注７）ムハーバラートについては，Hanna Batatu, *Syria's Peasantry, the Descendants of Its Lesser Rural Notables, and Their Politics,* Princeton, Princeton University Press, 1999, pp. 219-221, 237-242ff.; Hanna Batatu, “Some Observation on the Social Roots of Syria's Ruling Military Group and the Causes for Its Dominance,” *Middle East Journal,*

Vol. 35, No. 3, Summer 1981, pp. 331-332; Alasdair Drysdale, “The Succession Question in Syria,” *The Middle East Journal,* Vol. 39, No. 2, Spring 1985, pp. 246-257; Middle East Watch, *Syria Unmasked: The Suppression of Human Rights by the Asad Regime,* New Haven & London, Yale University Press, 1991, pp. 48-53; Volker Perthes, *The Political Economy of Syria under Asad,* London, I.B. Tauris, 1995, pp. 153, 182; Patrick Seale, *Asad of Syria: The Struggle for the Middle East,* London, I.B. Tauris, 1988, pp. 150-153, 162-165, 179-184, 421-440, 475-482ff. などを参照。

(注８) B・アサドは, 1971年から1982年にかけて自由学院（Ma ʻhad al-Ḥurrīyah：現在の殉教者バースィル・アル＝アサド学院 <Ma ʻhad al-Shahīd Bāsil al-Asad>）で初等・中等教育を受けた後，1982年から1988年にかけてダマスカス大学医学部に在籍した。その後，1988年から1992年までダマスカスのティシュリーン軍事病院（Mustashfā Tishrīn al-ʻAskarīyah）に勤務し，眼科学を専攻した。そして1992年には，ロンドンに渡り，セント・マリーズ・ホスピタル(Saint Mary’s Hospital)の博士課程で眼科学を専攻した。*Middle East Economic Digest,* Vol.43, No.31 p.3; *Al-Ḥayāh* (London), January 3, 10, 1999, June 11, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ* (London), June 11, 2000などを参照。

(注９) ʻIzzat al-Saʻdanī, *Bāsil fī ʻUyūn al-Miṣrīyīn*［エジプト人の目から見たバースィル］, Cairo, Al-Ahrām, 1995, pp. 262-263.

(注10) 村上大介「シリアにアサド家後継政権」(『季刊アラブ』第94号, 2000年秋）16ページ。

(注11) 共和国防衛隊司令官は，アニーサ・マフルーフの甥アドナーン・マフルーフ（ʻAdnān Makhlūf）が長らく務め, その後, アリー・マフムード・アル＝ハサン（ʻAlī Maḥmūd al-Ḥasan）に交替した。

(注12) バースィル・アル＝アサドは，共和国護衛隊の大統領治安（Al-Amn al-Riʼāsī）隊長として同隊を実質的に指揮する一方で，R・アサド勢力によるレバノンでの麻薬の栽培とシリアへの密輸を摘発し，政治的プレゼンスを誇示した。Perthes, *The Political Economy of Syria under Asad,* p. 268; al-Saʻdanī, *Bāsil fī ʻUyūn al-Miṣrīyīn* などを参照。

(注13) 青山「政治の多元化か…」40～41ページ; http://www.meib.org/articles/0002_me5. htm などを参照。なお, 1980年代半ばに体制から実質的に排除されていたR・アサドは，1998年２月に民族治安担当副大統領を解任され, バアス党を除名されることで，全ての公職を失った。

(注14) B・アサドが主導する「腐敗との闘い」が初めて大々的に宣伝されたのは, ナッジャール総合情報前部長が公金横領と“セックス・スキャンダル”への関与により逮捕された1998年７月であった。*Mideast Mirror,* Vol.12, No.127, July 6, 1998, p. 11 を参照。

(注15) *Al-Ḥayāh,* March 7, 2000.

(注16) B・アサドの“非公式”な政治発言については，例えば, “Fī Ḥiwār Shāmil maʻa al-Ḥayāh, Bashshār al-Asad: Al-Tafāʼul bi-al-Salām lā Yaʻnī al-Harwalah［『アル＝ハヤート』紙との包括的な対話のなかで, バッシャール・アル＝アサド：和平への楽観は性急さを意味しない］,” *Al-Wasaṭ*, No. 295, August 23, 1999, pp. 10-17; *Al-Sharq al-Awsaṭ*, June 12, 13, 2000を参照。

(注17) *Al-Ḥayāh,* February 20, 21, 23, 25, March 5, 2000.

(注18) 1941年，ダマスカス近郊のアル＝タッル（Al-Tall）村生まれ。ダマスカス大学文学部を卒業後, モスクワのオリエント研究所に留学し文学博士となる。その後，教職員組合文化・出版・広報担当副書記長(1971年～1974年), アラブ教職員連合(Ittiḥād al-Muʻallimīn al-ʻArab）外務担当副書記長（1974年～1975年, 本部――カイロ), 同連合書記長（1975年～1978年), アラブ学術研究所(Al-Maʻhad al-ʻArabī lil-Dirāsāt)所長(1975年～1978年)，教職員組合外務担当副書記長（1978年～1980年)，ダルア県知事（1980年～1986年)，ハッサケ県知事（1986年～1993年)，アレッポ県知事（1993年～2000年）を経て首相に就任した。*Al-Baʻth* (Damascus), March 8, 2000; *Al-Thawrah* (Damascus), March 8, 2000; *Tishrīn* (Damascus), March 8, 2000; *Al-Ḥayāh,* March 8, 9, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* March 8, 2000 などを参照。

(注19) *Al-Ḥayāh,* February 20, 2000.

(注20) 青山弘之「ミールー新内閣発足:『古参と“新

たな血”の融合』の真意（現地リポート，シリア①）」（『アジ研ワールド・トレンド』第58号，2000年７月）38～41ページ；*Al-Ḥayāh,* March 8, 9, 10, 11, 12, 13, 15, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* March 8, 2000.

（注21）Ṣādiq, *Ḥiwār ḥawla Sūrīyah,* pp. 73-74.

（注22）*Al-Ḥayāh,* February 20, 2000.

（注23）SANA (Syrian Arab News Agency), May 10, 2000.

（注24）*Al-Ḥayāh,* May 23, 2000.

（注25）ズウビー前首相の“粛清”と死については，青山弘之「ズウビー首相の“失脚”：体制が望んだ“最後の決断”（現地リポート，シリア②）」（『ワールド・トレンド』第59号，2000年８月）44-45ページ；*Al-Ba ʻth, May* 11, 22, 2000; *Al-Ḥayāh,* May 12, 14, 17 22, 23, June 13, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ* , May 11, 22, 2000; Interview, Anonymous, Beirut, September 9, 2000などを参照。

（注26）Ḥ・アサド前大統領の生涯については，青山弘之「果たし得ぬ“遺言”：ハーフィズ・アル＝アサドが『次世代』に課した難題」（『現代の中東』第29号，2000年７月）54～59ページを参照。

（注27）改正条項は，ただちに法令第９条（2000年６月10日）としてハッダーム副大統領が法令化した。*Al-Ba ʻth,* June 11, 2000; *Al-Ḥayāh,* June 11, 2000を参照。

（注28）*Al-Ḥayāh,* March 7, 2000.

（注29）軍における昇進もまた，行政法第９条および10条（2000年６月11日）としてハッダーム副大統領が法令化した。*Al-Ba ʻth,* June 12, 2000; *Al-Ḥayāh,* June 12, 2000を参照。

（注30）*Dustūr al-Jumhūrīyah al-ʻArabīyah al-Sūrīyah, 1973*［シリア・アラブ共和国憲法，1973年］，Damascus, Mu’assasat al-Nūrī , 1998, Article 103.

（注31）*Dustūr al-Jumhūrīyah al-ʻArabīyah al-Sūrīyah,* Article 84-1.

（注32）*Al-Ba ʻth,* June 12, 2000; *Al-Ḥayāh,* June 12, 2000.

（注33）*Dustūr al-Jumhūrīyah al-ʻArabīyah al-* Article 8.

（注34）*Dustūr al-Jumhūrīyah al-ʻArabīyah al-* Article 88.

（注35）Ḥizb al-Baʻth al-ʻArabī al-Ishtirākī, al-Qiyādah al-Quṭrīyah, *Taqārīr al-Mu’tamar al-Quṭrī al-Thāmin wa-Muqarrarātuhu al-Munʻaqid fī Dimashq fī al-Fatrah al-Wāqiʻah bayna 5/1 /1985-20/ 1 /1985: Al-Taqrīr al-Tanẓīmī*［1985年１月５日から1985年１月20日にダマスカスで開催された第８回地域大会での決議および決定事項：組織に関する決議］，Damascus, Maṭba ʻat al-Qiyādah al-Quṭrīyah, 1985, p. 357．なお，Ḥ・アサド政権下で地域大会は５回――第５回（1971年５月），第６回（1975年４月），第７回（1979年12月～1980年１月），第８回（1985年１月），および第５回臨時大会（1974年６月）――開催された。

（注36）軍事令第２号は，ハーリド・アル＝アズム（Khālid al-ʻAẓm）内閣時代の立法条例第51号（1962年12月22日），すなわち戒厳令に基づく非常事態令で，イスラエルとの戦争状態を口実に「バアス革命」直後に発令された。Middle East Watch, *Syria Unmasked,* pp. 23-25を参照。

（注37）予備選挙の詳細については，*Al-Ḥayāh,* May 5, 10, 11, 15, 20, 21, 22, June 13, August 25, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* June 11, 2000を参照。

（注38）1985年１月に開催された第13回民族大会（mu’tamar qawmī）で選出されたシリア人の民族指導部メンバーは，Ḥ・アサド前大統領，アフマル地域指導部副書記長，ハッダーム副大統領，マシャーリカ副大統領，カッダーフ地域指導部副書記長，Ｍ・ハイダル（1999年に除名），ナージー・ジャミール（Nājī Jamīl：1984年に党籍を“凍結”）である。

（注39）第８回地域大会で選出された地域指導部メンバーは，Ḥ・アサド前大統領，アフマル地域指導部副書記長，カッダーフ地域指導部副書記長，トゥラース国防大臣，ハッダーム副大統領，マシャーリカ副大統領，ワヒーブ・タンヌース（Wahīb Ṭannūs），カッドゥーラ人民議会議長，シハービー前参謀総長，Ｒ・アサド，アブド・アル＝ラウーフ・アル＝カスム（ʻAbd al-Raʼūf al-Kasm），ハムドゥーン，タウフィーク・サーリハ（Tawfīq Ṣāliḥah），Ｉ・Ｄ・ナースィル，ズウビー前首相，ハマーディー，アフマド・カバラーン（Aḥmad Qabalān），ア

ブド・アル＝ラッザーク・アイユーブ（‘Abd al-Razzāq Ayyūb），ディルガーム，Ｆ・ナースィル，ラシード・イフティリーニー（Rashīd Ikhtirīnī）である。

（注40）政治委員会はハッダーム副大統領を首座とする21名の代表と６名のオブザーバーにより，経済委員会はミールー首相を首座とする９名の代表により，そして組織委員会はＦ・ナースィルを首座とするその他すべての代表により構成され，Ｂ・アサドは組織委員会のメンバーとなった。

（注41）*Al-Ḥayāh,* June 18, 2000.

（注42）第９回シリア地域大会の詳細については，*Al-Ba ‘th,* June 18, 19, 20, 21, 25, 2000; *Al-Ḥayāh,* June 17, 18, 19, 20, 21, 22, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* June 19, 20, 21, 25, 2000を参照。

（注43）５月８日の公式発表で，カッダーフ地域指導部副書記長は，第９回地域大会を６月17日から５日間の予定で開催する，と述べたが，大会初日，トゥラース国防大臣が，「党の方針を決議し，指導部を選出するのには，3日もあれば十分だ」と発言し，大会の予定は５日から３日に短縮された。だが，６月19日に，1日の延長が決定され，最終的に大会は４日間開催された。*Al-Ḥayāh,* May 10, June 20, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ*，June 20, 2000を参照。

（注44）*Al-Ḥayāh,* June 20, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ*, June 20, 2000.

（注45）*Al-Ba ‘th,* June 21, 2000.

（注46）*Al-Ḥayāh,* June 26, 2000.

（注47）*Al-Ḥayāh,* June 26, 2000.

（注48）*Al-Ḥayāh,* June 28, 2000.

（注49）*Al-Ḥayāh,* June 28, 2000.

（注50）Ḥ・アサド前大統領の信任投票での支持率は，1971年３月が99.2%，1978年２月が99.6%，1985年２月が99.97%，1991年12月が99.142%，そして1999年２月が99.98%であった。

（注51）大統領信任投票にいたる経緯については，*Al-Ba ‘th,* June 28, 2000; *Al-Ḥayāh,* June 28, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ*, June 26, 28, 2000; *Al-Thawrah,* June 28, 2000; *Tishrīn*, June 28, 2000を参照。

（注52）1980年代半ばのＲ・アサドの“謀反”については，例えば，Drysdale, “The Succession Question in Syria,” pp. 246-257; Seale, *Asad of Syria,* pp. 421-440を参照。

（注53）砂山その子「シリア，ハーフィズ・アル＝アサド政権における“ソフト”な独裁体制維持のメカニズム：Lisa Wedeen 著 *Ambiguities of Domination: Politics, Rhetoric, and Symbols in Contemporary Syria* を中心に」（『アジア経済』第42巻第８号，2001年８月，掲載予定）。

（あおやま　ひろゆき／地域研究第２部）